

## ラス・クエバス三部作に見られる聖ブルーノ伝

### ——聖ブルーノ像の展開と三部作の成立——

坂本 龍太

#### はじめに

17世紀スペインの商都セビーリャにおいて画家として名声を築き上げたフランシスコ・デ・スルバランは、国内でも有数の修道院であるサンタ・マリア・デ・ラス・クエバスのカルトゥジア会修道院（以下ラス・クエバスのカルトゥジア会）から3点の絵画作品の依頼を受けた。この時、制作されたのが現在セビーリャ県立美術館に飾られている《食堂の聖ウーゴ》、《ラス・クエバスの聖母》、《聖ブルーノと教皇ウルバヌス2世》（以下ラス・クエバス三部作）である（図1-3）。いずれもカルトゥジア会の重要な美德を示唆していると解釈され、《食堂の聖ウーゴ》は「禁欲」、《ラス・クエバスの聖母》は「聖母への信心」、《聖ブルーノと教皇ウルバヌス2世》は「沈黙」に対応する<sup>1</sup>。先行研究においては、その制作年代が長く議論の争点であったが、現在では1655年で一致をみている<sup>2</sup>。

<sup>1</sup> 三点にほめかされた三つの美德（「禁欲」la mortificación, 「聖母への信心」la confianza en María, 「沈黙」el silencio）の解釈に関しては、スルバラン研究者の内ではほぼ一致している。これらがいずれもカルトゥジア会を代表する重要な美德であることは人口に膾炙している。Baticle, Jeannine, *Zurbarán*, (Exh. Cat.), New York, Metropolitan Museum of Art, 1988, p. 220; Delenda, Odile, *Los conjuntos y el obrador*, Madrid, 2010, vol.II, p. 244. 一方、セレーラは《聖ブルーノと教皇ウルバヌス2世》に、「沈黙」の美德に加え、「孤独 (soledad)」の美德も見出している。Serrera, Juan Miguel, *Zurbarán*, (Exh. Cat.), Madrid, Museo Nacional del Prado, 1988, p. 306.

<sup>2</sup> Cascales y Muños, J., *Francisco de Zurbarán, su época, su vida, y sus obras*, Madrid, 1911, pp. 39-40; Soria, M. S., *The Paintings of Zurbarán*, London, Phaidon, 1953, p. 12; Guinard, Paul, *Zurbarán et les peintres espagnols de la vie monastique*, Paris, 1960 (ed. Esp.: *Zurbarán: y la pintura española de la vida monástica*, Madrid, 1967, pp. 178-185.); Caturla, María Luisa, *El conjunto de las Cuevas*, Granada, 1968; Brown, Jonathan, *Francisco de Zurbarán*, New York, 1974 (ジョナサン・ブラウン (神吉敬三 訳) 『スルバラン』美術出版社、1976年、20頁) ; Gállego, Julián, and José Gudiol, translated from spanish by Kenneth Lyons, *Zurbarán 1598-1664 Biography and Critical Analysis*, London, 1977, pp. 298-300; Mallory, Nina Ayara, "Notas críticas sobre la pintura de Zurbarán", *Goya*, 201, 1987, pp. 156-161; Baticle, Jeannine, *Zurbarán*, (Exh. Cat.), New York, Metropolitan Museum of Art, 1988, pp. 219-233; Serrera, Juan Miguel, *Zurbarán*, (Exh. Cat.), Madrid, Museo Nacional del Prado, 1988, pp. 306-316; Valdieso, Enrique, *Zurbarán: IV centenario; Museo de Bellas Artes de Sevilla, 8 de octubre-9 de diciembre, 1998* (Exh. Cat.), Sevilla, Museo de Bellas Artes, 1998, pp. 18-19; Pérez Sánchez, A.E., "El último Zurbarán", *Zurbarán: La obra final. 1650-1664*, (Exh. Cat.), Bilbao, Museo de Bellas Artes, 2000, pp. 15-37; Delenda, Odile, *Catálogo razonado y crítico*, Madrid, 2009, vol.I, pp. 664-671; *Los conjuntos y el obrador*, Madrid, 2010, vol.II, pp. 243-255; 拙論「スルバランの様式発展と「ラス・クエバス三

《食堂の聖ウーゴ》、《聖ブルーノと教皇ウルバヌス2世》はカルトゥジア会創設者聖ブルーノの生涯から主題が選択され、《ラス・クエバスの聖母》はこれとは無関係な、聖母によるカルトゥジア会士の庇護をシンボリックに表した図像となっている<sup>3</sup>。

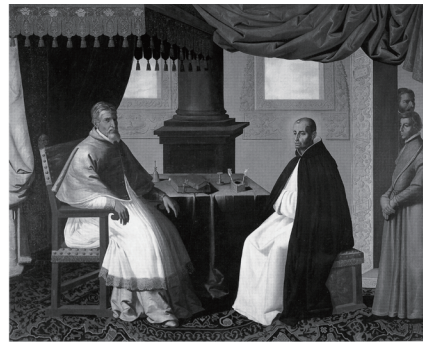
17世紀に列聖された聖ブルーノは、トリエント会議以降絵画の主題として好んで描かれた聖人の一人である。サイクルと呼ばれる聖人の生涯を主題とした絵画連作もいくつか制作され、それらはトリエント公会議後の壮麗な宗教美術の一端を垣間見せている。スルバランが制作したラス・クエバス三部作もまた、聖ブルーノを主題とした絵画連作ではあるが、ここでは聖具室装飾のために聖人の生涯から二場面のみが選択された。注目すべきは、その場面選択の特異さである。いずれも聖人の美德を明確に示すハイライトとなる場面とは言い難く、聖ブルーノを扱った絵画作品の主題には見られない珍しい場面といえる。類例はほとんどない。なぜこれらの場面が修道会の美德を示すために選択され、そして美德を示す絵画として機能したのであろうか。先行研究ではこうした問題が顧みられず、主題や作品の成立した背景に関する考察は表面的なものにとどまっている。



(図1) フランシスコ・デ・スルバラン  
《食卓の聖ウーゴ》1655年頃 油彩/カンヴァス  
262×307cm セビーリャ美術館



(図2) フランシスコ・デ・スルバラン  
《ラス・クエバスの聖母》1655年頃油彩/カンヴァス  
267×320cm セビーリャ美術館



(図3) フランシスコ・デ・スルバラン  
《ウルバヌス2世謁見する聖ブルーノ》  
1655年頃 油彩/カンヴァス 272×326cm  
セビーリャ美術館

部作」『美術史研究』第50冊 103-124頁。

<sup>3</sup> 描かれたカルトゥジア会士達の中にニンプスなどによって差別化された人物はおらず、聖ブルーノが描き込まれているとは考え難い。聖ブルーノ伝においても聖母が出現する場面はない。デレンダは、前景二人の人物をロザリオの祈禱の普及に貢献したプルシアのドミニク、およびジャン・ドゥ・ロードと特定しているが、確証はない。Delenda (2009), p. 671.

よって、本論稿では17世紀の聖人崇拜、聖ブルーノ像の展開を概観し、作品の文学的な典拠となった著作を基に主題解釈を進め、聖ブルーノ伝から主題を選び抜いた二つの作品《食堂の聖ウーゴ》と《聖ブルーノと教皇ウルバヌス2世》がそれぞれ「禁欲」と「沈黙」の美德を提示する絵画として成立し得た事由を明確にする。

## 1. 17世紀聖人崇拜

トリエント公会議において教皇ピウス4世が聖人への敬意を示し、その存在の重要を再確認したことによって、以後、聖人の図像が数多く制作されることとなる<sup>4</sup>。トリエント教令が「司教たちは、すべての聖画像から信者に聖人たちがキリストから与えられた恩恵とたまものを思い出させるだけでなく、神の聖人たちを通じて、奇跡と健全な模範とが与えられるように教えなければならない<sup>5</sup>」と規定するように、聖人たちは信徒にとって救済への仲介者であり、見習うべき規範であった<sup>6</sup>。テオファネス・エヒドは17世紀のスペインで聖人像が制作された目的と役割を3点提示している。すなわち修道院構内における修道士や修練士たちへの教育として、対外的に修道会の霊的豊かさを示すプロパガンダとして、そしてそれぞれの修道会間の競合における武器としてである<sup>7</sup>。絵画にせよ彫刻にせよ聖人像は、彼らに捧げられた小礼拝堂はもちろん、回廊や聖具室、修室、図書室など修道院構内の様々な場所に設置された。彼らの中には、新たに聖人の列に加えられた者も多く、その多くは修道会の創始者や殉教者であった。列聖を検討するにあたっては、明確に設けられた基準に沿ってその候補者の聖性が審査された<sup>8</sup>。その際、奇跡によって確証される美德のすばらしさやその者の生涯における多種多様な卓越さといった中世以来の基準に代わり、17世紀初頭から、その者が有した英雄的な美德や模範的な生涯が重視されるようになる。すなわち、治療や空中浮揚などの奇跡の行いよりも、キリストの受難への参加にその聖性が求め

<sup>4</sup> 3部構成の法令によって聖人像の正当性が確認された Ceballos, Alfonso Rodríguez G. de, "Image and Counter-Reformation in Spain and Spanish America", *Sacred Spain: Art and Belief in the Spanish World* (Exh. Cat.), Indianapolis, Indianapolis Museum of Art, 2009, p. 20.

<sup>5</sup> デンツィンガー・シェーンメッツァー編 A・ジンマーマン監修 浜寛五郎訳 『カトリック教会文書資料集—信教および信仰と道徳に関する定義書』エンデルレ書店、1982年、315-316頁。

<sup>6</sup> Ceballos, Alfonso Rodríguez G. de, "Ciclos pintados de la vida de los santos fundadores. Origen, localización y uso en los conventos de España e Hispanoamérica", *La imagen religiosa en la Monarquía hispánica: Usos y espacios*, Madrid, 2008, pp. 3-4.

<sup>7</sup> Egidio, Teófanos, "La vida conventual y las devociones populares en el siglo XVII", *Zurbarán ante su centenario*[1598-1998], Seminario de Historia del Arte, Fundación duques de Soria, Valladolid, 1999, p. 39.

<sup>8</sup> 1634年に発布されたウルバヌス8世の使徒憲章によって列聖に至る手続きが定められた。Schutte, Anne Jacobson, *Aspiring Saints: Pretense of Holiness, Inquisition, and Gender in the Republic of Venice, 1618-1750*, Baltimore and London, pp. 77-78.

られたのである<sup>9</sup>。

列聖の審査において、聖人の生涯における奇跡や徳業が調査されたことは、美術の分野に影響を与えた。16世紀後半から17世紀前半にいわゆるサイクルと呼ばれる聖人の生涯の出来事を主題とした絵画連作が数多く生み出されることとなった。聖人伝サイクル自体はかの有名なジョットの聖フランチェスコの生涯連作に見られるように、中世にはすでに作例が存在するが、トリエント公会議以降新たに多くの宗教家が聖人の列に加えられたため、比較的新しい時代の聖人や、これまでそれほど芸術の主題としてはなじみがなかった聖人たちまで聖人伝サイクルの主題となり、そのレパートリーが増加した。例えば、イグナティウス・デ・ロヨラ、アビラの聖テレサ、聖ペドロ・ノラスコや聖ファン・デ・マタといった新たに聖人として認可された者たちが挙げられる<sup>10</sup>。こうした聖人伝サイクルは、修道会の中の者たちにとっては教育的効果および、原点回帰への戒めを、外の者たちには修道院の聖性のプロパガンダとしての効果を持った<sup>11</sup>。そのため、主役となる聖人の生涯における重要な事件や、美德の行い、奇跡などの場面が主題として選択され、ドラマティックに描かれた。

先に挙げた聖人たちよりも前の世代でありながら長く列聖とは無縁であったカルトゥジア会創設者聖ブルーノもまた、この時期に列聖され、サイクルでその生涯を称えられた聖人の一人であった。

## 2. カルトゥジア会の創設者聖ブルーノ

### 2-1. ケルンのブルーノ<sup>12</sup>

聖ブルーノは1030年頃、ケルンの貴族家庭に生まれた。若くして学問を修めるべくフランスに渡り、自由学芸と神学を当時教会改革の中心であったランスで学んだ。1050年頃にはランス大司教によって司教座聖堂付属学校の教授職に任命され、その知識と人柄は多くの人を惹きつけ、国内のみならずヨーロッパ諸国から生徒が集まった。この中には将来ローマ教皇ウルバヌス2世となるラジェリのオドもいた。聖ブルーノは汚職問題をめぐって大司教と対立し、教皇聖グレゴリウス7世によってランス大司教が解任されると、選挙でその後任に選出される。しかし、神の召命を自覚した聖ブルーノはこの依頼を断り、隠修生活を希求した。

聖ブルーノは同じ志を持った6人の仲間と共に、隠修生活を求めて旅立ち、助言を求めてグルノーブルの司教聖ウーゴのもとを訪れた。聖ウーゴは彼らにラ・グランド・シャルトルーズ山系

<sup>9</sup> *Ibid.*, p. 77.

<sup>10</sup> Ceballos (2009), pp. 3-21.

<sup>11</sup> *Ibid.*, p. 5.

<sup>12</sup> 聖ブルーノの生涯の概略については主に以下の文献を参照した。Escudero, Juan Mayo, *Santos y Beatos de la Cartuja: Reseñas biográficas escritas por varios autores anónimos cartujanos compiladas e ilustradas*, Analecta Cartusiana 159, Salzburg, 2000, p. 74.

の地を提供し、隠修生活が始まったのである。

しかし、聖ブルーノはすぐに隠遁所から連れ出されることになる。かつての教え子であり、当時のローマ教皇であったウルバヌス二世によって、ローマに召喚されたのである。皇帝との争い、対立教皇の問題によって苦境に立たされていたウルバヌス 2 世はかつての師に助言を求めた。この時聖ブルーノとともに隠遁していた 6 人の同志達も同行したか否かは定かではない。しかしいづれにせよ、この後、彼らと聖ブルーノの別離は決定的となる。教皇は、博識な聖ブルーノの助言がもたらす教会政治への貢献を重要視して、彼の帰郷を望まなかったのだ。最終的に教皇は聖ブルーノの隠修生活を認可したものの、自らの傍に留めておきたいとの思いから、イタリアのカラブリアを修行の地に指定した<sup>13</sup>。このため、聖ブルーノがシャルトルーズの仲間達の元に戻る事は終ぞ叶わなかった。聖ブルーノはその生涯の最後までカラブリアで隠修生活を送ることとなった<sup>14</sup>。

## 2-2. 聖ブルーノの列聖と崇敬

聖ブルーノは 11 世紀の人物でありながら、聖人として公認されるのは遅く、非公式ではあるものの 1514 年になってようやくレオ 10 世によりその聖性が認可された<sup>15</sup>。聖人の列に加わるのは、さらに 1 世紀後の 1623 年であった。このため、16 世紀まで絵画や彫刻作品の主題にされることがほとんどなく<sup>16</sup>、同様に伝記が執筆されるのも、聖フランチェスコや聖ドミニコなどの他の中世の聖人たちに比べ、非常に遅い。デ・ヴォラギネの『黄金伝説』には含まれず、聖ブルーノの伝記が出現するのは 16 世紀になってからであった<sup>17</sup>。16 世紀に執筆された聖ブルーノ伝の中ではケルン、サンタ・バルバラのカルトゥジア会のラウレンティウス・スリウスが執筆した『聖ブルーノの生涯』は重要で、その後の聖ブルーノ伝に幅広く活用されている。実際、スペインにおいてアロンソ・ビジェーガスやペドロ・デ・リバデネイラがスリウスの聖ブルーノ伝を参考に

<sup>13</sup> カラブリア (Calabria)。イタリア半島最南部に位置する。この地は 1063 年教皇アレクサンデル 2 世を援助し、サラセン人を撃退したノルマン諸公ロベール・ギスガルド、その弟ルッジェッロ 1 世、彼らの甥ルッジェッロ 2 世の領地であった。1090 年にルッジェッロ 2 世は聖ブルーノが隠遁地として選んだ、セクィッラチェ司教区のセッラにあるラ・トルレ (La Torre) を喜んで彼に寄進した。鈴木宣明「カルトゥジア会—創立九〇〇年を記念して—」『上智史学』No.28 1983 年、17 頁。

<sup>14</sup> 一方、シャルトルーズに残された聖ブルーノの同志たちは、ランドウイヌスを彼らの長に定め、隠修生活を続けた。ランドウイヌスやシャルトルーズの修道士たちは聖ブルーノと手紙を交わすことによって聖ブルーノの霊的指導を受け、カルトゥジア会の最初のコミュニティが生まれたのである。Escudero (2000), p. 82.

<sup>15</sup> レオ 10 世は奇跡の調査や通常の形式をとらず、口頭でカルトゥジア会士達に敬意を表し、典礼歴に組み込んだ。Magaña, Elena Sáinz, "La voz de las imágenes en el silencio de la cartuja. La imagen de Bruno de Colonia en el panorama de la iconografía de los santos", *Del silencio de la Cartuja al fragor de la orden militar*, Aguilar de Campoo, 2010, p. 110.

<sup>16</sup> その最も早い時期の作例でも 15 世紀の三連祭壇画と、3 世紀も後のことである。Ibid., p. 109.

<sup>17</sup> Ibid., p. 110.

し、聖人伝集成である『フロス・サンクトルム』中の聖ブルーノの生涯を執筆している<sup>18</sup>。双方とも聖ブルーノのランスでの教授職に始まり、シャルトルーズへの隠遁、ローマへの訪問、カプリアへの隠遁、そしてその死と物語の大筋は一致している。続いて、バレンシアのカルトウジア会士ファン・デ・マダリアガが1596年により執筆した『カルトウジア会の創始者聖ブルーノの生涯 (Vida del seráfico Padre San Bruno patriarca de la Cartuja)』は重要で、スペイン語で書かれた聖ブルーノ伝では最も広く流通した<sup>19</sup>。マダリアガもまた、スリウスの聖ブルーノ伝を参考にしているが、幾つか新たな逸話を取り入れ、聖人の生涯を一層豊かなものにした。

### 2-3. 聖ブルーノ像

列聖に際する聖ブルーノへの崇敬の高まりは、文学のみならず美術の分野においても作品制作の大きな動機付けとなった。16、17世紀は聖ブルーノ図像にとって最も充実した時期となり、イタリアやスペインを中心に国内の著名芸術家たちの多くが聖ブルーノ像を手掛けている。

聖ブルーノは11世紀の聖人であるため、近代の聖人、イグナティウス・デ・ロヨラや聖ロサ・デ・リマなどとは異なり、デスマスクや生前の（あるいは遺体に基づく）肖像画など実際の相貌を伝えるイメージソースは残されていない。このため、伝統的な相貌表現が真正さを有するものとして適用される<sup>20</sup>。それは多くの聖ブルーノ像に見られるような、若く、剃髪をし、髯が剃られた相貌である<sup>21</sup>。これに加え、幾つか聖人の美德を象徴するモチーフが描き込まれる。例えば、16、17世紀の幾つかの聖ブルーノ



(図4) Woensam による  
*Vita Sancti Brunonis*(1516)  
の表紙

<sup>18</sup> Villegas Selvago, Alonso de, *Flos sanctorum y Historia general de la vida y hechos de Iesu Christo Dios y Señor nuestro y de todos los Sanctos de que reza y haze fiesta la Iglesia Catolica...*, Barcelona, 1593, 5parte, fol. 127r-128v; Ribadeneyra, Pedro de, *Flos sanctorum o libro de la vida de los santos...*, Madrid, 1604, pp. 187-192.

<sup>19</sup> マダリアガはこの本の出版に際し、本部グランド・シャルトルーズにバレンシア市から助成金を受けている。Puig-Rigau, José-Oriol, *Escritores cartujos de España*, Analecta Cartusiana 161, Salzburg, 1976, Tomo I, p. 132.

<sup>20</sup> バロック期、聖人が実際に使用したものを保存することと同様に、聖人への物質的な記憶を残すためデスマスクや、死の床の肖像画制作が行われた。一方、古い時代の聖人たちにはそのような真の肖像 (vera effigie) が残されていないため、文書史料や伝説などを頼りに、その相貌が再形成された。Quiles, Fernando, "La invención de la forma y la concreción del gesto: La hagiografía creada para la Sevilla barroca", *La imagen religiosa en la Monarquía hispánica: Usos y espacios*, Madrid, 2008, pp. 135-149.

<sup>21</sup> ただし、髯を生やした老年の聖ブルーノ像も存在する。Campuzano, Julia Lopéz, "Aportaciones a la iconografía de San Bruno", *Anales de Historia del Arte*, vol.7, 1997, pp. 196-198.

伝の表紙に見られるオリーブの枝や棕櫚の枝、地球儀などがそうである（図4、5）<sup>22</sup>。また、聖人の生涯に起因するモチーフとして司教冠と司教杖、星といったモチーフも多く見られる。司教冠と司教杖は、聖ブルーノが教皇から薦められたレッジョの司教職を固辞した事実に由来し、謙遜の美德を伝え（図6）、一方の星のモチーフ、七つの星であることが多いが、これは聖ウーゴが聖ブルーノの訪問を受ける前に夢の中で、聖ブルーノと6人の同志たちを意味する七つの星を見たエピソードに由来する<sup>23</sup>。これらに加え、荒れ野で苦行する隠者としての姿が描かれる際には十字架や髑髏がともに描かれる（図7）。これは聖ヒエロニムスや隠者聖パウロなどの図像と共通し、俗世間から離れ、荒れ野で改悛する隠者に典型的なモチーフといえる<sup>24</sup>。聖ブルーノの最も重要な美德、その聖性は荒れ野での厳しい修道生活にある。そのため、16、17世紀の画家たちによって最も頻繁に描かれたのは、こうした荒れ野で苦行をする聖ブルーノの姿であった。粗末な東屋と厳しい岩山を背景とし、十字架や髑髏などを傍らに置き、祈祷に励む禁欲的で現世の忌避的な姿が聖ブルーノの典型的なイメージであり、同時期の文学においてもこのイメージは共通する。ロペ・デ・ベガは、『神への愛に満ちた魂の独白（*Soliloquios amorosos de un alma a Dios*）』のプロローグを、厳しい岩山に聖ブルーノがカルトゥジア会を創設した説明から始めている<sup>25</sup>。



（図5）フランシスコ・リバルタ《聖ブルーノ》1600年  
油彩/カンヴァス 189×79cm  
バレンシア美術館



（図6）フランシスコ・デ・スルバ  
ラン《聖ブルーノの法悦》1637-39  
年 油彩/カンヴァス 341×195cm  
カディス美術館



（図7）サンチェス・コターン  
《祈る聖ブルーノ》1603-27年  
油彩/カンヴァス 245.5×178cm  
グラナダ美術館

<sup>22</sup> 聖ブルーノの図像についてはファン・マジョ・エスクデロの著書に詳しい。Escudero, Juan Mayo, *Iconografía de São Bruno*, Analecta Cartusiana 237, Salzburg, 2006.

<sup>23</sup> Magaña, *op.cit.*, pp. 120-122.

<sup>24</sup> Muela, Juan Carmona, *Iconografía de los santos*, Madrid, 2009.

<sup>25</sup> ロペ・デ・ベガは中傷する者を批判するため、言葉による罪を免れるため沈黙を貫いた聖ブルーノの美

示した聖ブルーノの単独像に加え、前述の16、17世紀に制作された聖ブルーノ伝サイクルは重要である。その壮麗さは、この時期の聖ブルーノ像の盛り上がりを雄弁に物語っている。16世紀に制作された最も早い時期の作例であるイタリアのバルナルディーノ・ポセッティのサイクルに始まり<sup>26</sup>、16世紀後半にイタリアのランフランコ、17世紀にスペインでサンチェス・コターン<sup>27</sup>、ピセンテ・カルドゥーチョ、フランスではル・シュウールが聖ブルーノ伝サイクルを手掛けた<sup>28</sup>。それぞれのサイクル中に描かれた主題に差異はあるが、重要な場面は概ね共通して描かれている。例えば、聖ブルーノが隠遁を決めるきっかけとなった、断罪されたディオクレス、聖ウーゴへの訪問、隠遁所の建設、教皇からの司教職着任依頼の拒否、ルッジェッロ1世への警告、そして死の床の聖ブルーノなどの主題がいずれのサイクルにも含まれている。こうした出来事が聖ブルーノの生涯における重要な瞬間として認識されていたことが看取される。

### 3. ラス・クエバス三部作

一方、スルバランが描いた聖ブルーノの生涯の二場面《食堂の聖ウーゴ》(図1)と《聖ブルーノと教皇ウルバヌス2世》(図3)は、他に類似した作例がほとんど存在せず、稀有な作例といえる。《食堂の聖ウーゴ》は、カルトゥジア会における肉食禁止の教えが奇跡によって神に認可された逸話に基づき、《聖ブルーノと教皇ウルバヌス2世》には、聖ブルーノがローマにおいて教皇ウルバヌス2世に深刻な教会情勢に関して助言を与えた史実に基づいている。それぞれは修道会の記念碑的な瞬間と、聖人の重要な功績を示す瞬間を表わしているが、この二場面が描かれることは極めて珍しい。教皇庁を舞台とした場面では、聖ブルーノの到着や司教職の拒否といった主題が描かれることはあるものの、会談の場面は描かれない。一方の食堂の逸話に関しては、これと類似した主題を見出すことすら難しい。さらに付言するならば、先に挙げたビジェーガスやリバデネイラのフロス・サンクトルムにもこの逸話は登場しない。貴重な同主題を扱った作例はカルドゥーチョの聖ブルーノ伝サイクルに見られるもののみである<sup>29</sup>。

---

徳の行いを引き合いに出した。 Raynié, Florence, "Silencio pro Deo y elocuencia pro domo: San Bruno instrumentalizado por Lope de Vega", *Criticón*, 92, 2004, pp.65-84.

<sup>26</sup> Campuzano, Julia Lopéz, "La iconografía de San Bruno en las cartujas de Andalucía", *Los cartujos en Andalucía*, *Analecta Cartusiana* 150, Salzburg, 1999. P. 44.

<sup>27</sup> ただし、ファン・サンチェス・コターンがグラナダのカルトゥジア会で聖ブルーノの生涯の絵画連作は、重要場面の欠如もあり、聖人伝サイクルとしては不完全なものである。 Beutler, Werner, *Vicente Carducho: el gran ciclo cartujano de El Paular*, Köln, 1998, p. 75.

<sup>28</sup> 22点の絵画で構成される聖ブルーノ伝サイクル。1649年前後に完成した。 Mérot, Alain, et al., *Eustache Le Sueur*(Exh. Cat.), Grenoble, Musée de Grenoble, 2000, pp. 90-91.

<sup>29</sup> これらに加え、「聖母による庇護」のテーマも他の聖ブルーノ伝サイクルには見られず、カルドゥーチョの《聖ヨセフと洗礼者ヨハネを伴うカルトゥジア会の庇護者聖母マリア》を除けば、唯一近いテーマとして挙げられるのはサンチェス・コターンによる聖ブルーノ伝連作中の《ロザリオの聖母》のみである。 Beutler, *op.cit.*,



スルバランがこの二つのなじみの薄い主題を描くにあたり、カルドゥーチョ作品を参考にしたことは、その構図やモチーフの一致から間違いない(図8、9)。とりわけ双方の《聖ブルーノと教皇ウルバヌス2世》では、構図や机上のモチーフ、後方の二人の人物など共通する要素が際立っている。

カルドゥーチョの2作品はエル・パウラルのカルトゥジア会の回廊を飾った27点の聖ブルーノ伝サイクルに含まれる。このサイクルの他にも回廊には「著名なカルトゥジア会士」を主題にした16点、各国の「殉教したカルトゥジア会士」を主題にした11点、そしてスペインとカルトゥジア会の紋章一点ずつの絵画が飾られた<sup>30</sup>。聖ブルーノ伝サイクルはランスでの教授職に始まり、荒れ野への出発、聖ウーゴへの訪問、修道院の建設、ローマへの召喚、といった聖人の生涯の重要な27の場面から構成される。カルドゥーチョが聖ブルーノ伝サイクルを制作するうえで文学典拠として使用したのは、当時スペイン語で執筆された唯一の聖ブルーノ伝である前述のマダリアガの『カルトゥジア会の創始者聖ブルーノの生涯』であろう<sup>31</sup>。

### 3-1. 食堂の奇跡

《食堂の聖ウーゴ》はカルドゥーチョのサイクル中で《湧水の奇跡》と《修道衣を受け取る聖ウーゴ》の間に位置づけられる<sup>32</sup>。マダリアガはカルトゥジア会の食堂で起きた奇跡を詳しく物語っているが、ここでは紙幅の都合上、その要約を紹介するに留めたい。

修道生活を始めた聖ブルーノは、ある日司教聖ウーゴから肉を送られる。四旬節の前であったため、

(図8) ビセンテ・カルドゥーチョ  
《食堂の聖ウーゴ》1628-32年  
油彩/カンヴァス 345×315cm  
※市民戦争時に紛失したため、現在は質の悪い写真しか残されていない



p. 143.

<sup>30</sup> カルドゥーチョのサイクルは2001年に修復が開始され、2006年に完了した。市民戦争時に何点か紛失してしまった作品はあるものの、2011年からエル・パウラルのカルトゥジア会の回廊に再び掛けられている。Ruiz Gómez, Leticia, "La recuperación de la serie cartujana de El Paular, *La recuperación de El Paular*", Madrid, 2013, pp. 185-202.

<sup>31</sup> Beutler, *op.cit.*, p. 84.

<sup>32</sup> 作品の順番については同時代に行われたエウヘニオ・カヘースらによる査定記録のコピー(18世紀に作成)から読み取ることができる。そこには作品番号とともに主題や査定額等が記されている。Delgado López, Félix, Juan de Baeza y las pinturas de Vicente Carducho en la cartuja del Paular, *Locus Amoenus*, 4, 1998-1999, pp. 198-200.

肉食は禁止されていなかったが、それでも食べるべきか否か決め兼ね、仲間たちと討論する。そのうちに彼らは奇跡によって深い眠りについてしまう。その後、聖ウーゴが肉食の禁じられている聖週間に彼らの下を訪れると、修道士たちが肉の載った皿を前に座している光景を目の当たりにする。聖ウーゴはこれに憤慨し、同時に目を覚ました聖ブルーノたちに肉食について詰問する。すると食卓の肉は灰に代わったのである<sup>33</sup>。

マダリアガの著作は2部構成を取り、1部で聖ブルーノの生涯、2部でカルトゥジア会の重要な教えや慣習を扱っている。実はこの食堂の逸話は、1部の聖ブルーノの生涯中ではなく、2部で語られている。すなわち、このエピソードは外伝のようなものと認識すべきであろう<sup>34</sup>。カルトゥジア会の重要な教えである肉食の禁止が、奇跡のエピソードを通して、神の意志によって認められたものとしてその正当性の裏付けがなされているのである<sup>35</sup>。物語は次の一文で締めくくられる、

我々の神父達はこの不可思議を論拠として称賛し、決して肉を食べないことを提起した。これを神の意志と理解したのである<sup>36</sup>。

### 3-2. 聖ブルーノと教皇ウルバヌス2世の対談

一方の《聖ブルーノと教皇ウルバヌス2世》は《ローマで同行者に別れを告げる聖ブルーノ》と《レッジョの司教職を拒否する聖ブルーノ》の間に位置する<sup>37</sup>。マダリアガはこの場面を以下のように叙述する。

教皇にはその聖なる隠者と共にいる事は大きな喜びであり、慰めであった。聖ブルーノから世の事について多くが語られた。そして、教皇は聖ブルーノがかつての師であるため、助言者という役目よりも低い務めは認めなかった。教皇はその職務、教会の仕事、ハイン

<sup>33</sup> Madariaga, Juan de, *Vida del seráfico Padre San Bruno patriarca de la Cartuja*, Valencia, 1596, fol. 147 r-148 r.

<sup>34</sup> 第3章7節「我々の禁欲への是認として主が示された奇跡について (De algunos milagros que ha mostrado nuestro Señor en confirmación de nuestra abstinencia.)」中で語られ、その後、他の肉食禁止に纏わる奇跡も語られる。*Ibid.*, fol., 146v-152v.

<sup>35</sup> カルトゥジア会の厳しい肉食禁止への批判があったことも事実で、リバデネイラは厳格な禁欲的態度は称賛を得る一方でその行き過ぎを批判されることがあったことを伝えている。Ribadeneyra, *op.cit.*, p. 189. 肉食の禁止は継続されたものの、断食に関しては1679年の総会において規定がより緩やかなものとなった。Antiquera Luengo, Juan José, *La cartuja de Sevilla: historia, arte, y vida*, Madrid, 1992, p. 92.

<sup>36</sup> “Ponderando como es razón nuestros Padres aquestas marauillas propusieron de jamás comer carne, entendiendo ser aquella voluntad diuina.” Madariaga, *op.cit.*, fol.148r.(引用文はすべて拙訳、原文のまま引用)

<sup>37</sup> Delgado (1998-1999), p. 198.

リヒとの古い訴訟、前任者が置かれた窮地、世俗勢力の騒乱と無礼行為によってローマが受けた取り返しのつかない損害と破滅、対立教皇派による多くの聖職者の壊乱、そして最後にこれらのシスマによって悩まされている教会の大きな悲劇的状况を伝えた。教皇は、助言者や師ブルーノの考えなくしては、重要なことは何もしなかった。彼は教皇の友人にして同僚であり、全てに満足していた<sup>38</sup>。

聖ブルーノは教皇ウルバヌス2世のかつての師であり、その豊富な知識は、厳しい教会状勢において有益なものであった。カルドゥーチョとスルバランの作品の画中に描かれた机の上の本は聖ブルーノの博識をほめかしている。教会はこの後、幾つかの公会議を経て、活力を取り戻し、ウルバヌス2世は十字軍を呼びかけることになる。したがって、教会の復興において、助言者として役割を果たした聖ブルーノの功績をこの絵は伝えている<sup>39</sup>。

以上の二場面がラス・クエバス三部作においてカルドゥーチョのサイクルから独立し、「禁欲」と「沈黙」の美德を示すために描かれた。カルドゥーチョの先行作例との構図やモチーフの類似から、文字通り2作品をサイクルから選んで抜き取ったような印象を受けよう<sup>40</sup>。こうしたやや唐突な作例の流用には、カルトゥジア会特有の美術作品に対する態度が反映されている。カルトゥジア会では、こうした美術作品の着想の借用が修道院間でしばしば行われる。

(図9) ビセンテ・カルドゥーチョ  
《聖ブルーノと教皇ウルバヌス2世》  
1628-32年 油彩/カンヴァス 345×315cm  
エル・パウラールのカルトゥジア会  
©Museo Nacional del Prado

<sup>38</sup> “Recibio no pequeño consuelo y alegría el Papa de verse con aquel santo Ermitaño, de quien tantas cosas se dezian por el mundo: y no permitio, que auiendo sido su Mestro, le siruiese en otro oficio menor que de consejero suyo. Comunicole sus trabajos, y los de la Yglesia, los pleytos viejos que tenia con el Emperador Enrique, los aprietos en que auia puesto a sus antecesores, las ruinas y los daños irreparables que auia Roma recibido por el decomedimiento y motin de los seglares, las disoluciones de muchos de los eclesiasticos que seguian el vando del Antipapa, y finalmente la miseria grande que padecia con estos cismas el estado de la Yglesia. No hazia cosa de importancia sin consejo y parecer del Maestro Bruno: el era su amigo, y compañero, y todo su contento.” Madariaga, *op.cit.*, fol. 36r.

<sup>39</sup> Cuartero y Huerta, Baltasar, *Relación de descriptiva de los cincuenta y seis cuadros pintados por Vicencio Carduchi para el claustro grande de la Cartuja del Paular*, Madrid, 1951, p. 39.

<sup>40</sup> 《ラス・クエバスの聖母》に関しても、エル・パウラールのカルトゥジア会にあったカルドゥーチョの先行作例を基にしたと推察される。カルドゥーチョは《聖ヨセフと洗礼者ヨハネを伴うカルトゥジア会士の庇護者聖母マリア》で、修道士をマントで包み込むようなポーズをとる聖母を描いている。Beutler, *op.cit.*, pp. 140-143.

#### 4. カルトウジア会修道院間の美術交流

時として、同一修道会の修道院間において美術作品そのものの移動やそのイメージの伝播によって、美術作品の着想が共有されることがあるが、カルトウジア会ではこれが頻繁になされる。これは明確な規定や確たる美学に依るものでなく、芸術的な傾向、嗜好に依拠する。例えば、地元のカルトウジア会に作品を制作した芸術家が好評を得て、幾つかの、それも地理的に遠く離れたカルトウジア会修道院で登用される事例がいくつか見られる<sup>41</sup>。スルバランはラス・クエバスのカルトウジア会の他に、ラス・クエバスのカルトウジア会の娘修道院であるヘレス・デ・ラ・フロンテッラ（以下ヘレス）のカルトウジア会からも作品依頼を受けており<sup>42</sup>、これが1630年代末になされたことを考慮すると、ヘレスでの仕事がラス・クエバスのカルトウジア会からの依頼につながった可能性が高い。というのも、スルバランに絵画制作を依頼したブラス・ドミンゲスは、ラス・クエバスのカルトウジア会の修道院長に就任する前にヘレスのカルトウジア会の修道院長を務めており<sup>43</sup>、同地に飾られたスルバラン作品を目にしたことが聖具室絵画を依頼する動機となったことは十分に考え得るのである<sup>44</sup>。

他方、イメージや着想の伝播、供給はより頻繁に生じる。その代表的な作例として、リバルタの《聖ブルーノ》やジャン＝バティスト・ジュヴネの《祈る聖ブルーノ》が挙げられる。これらは人気のある図像であったようで、後世において幾度となくコピー、あるいは類似作品が制作されている（図5、10、11）<sup>45</sup>。他にもグランド・シャルトルーズの回廊を飾ったル・シュウールの聖ブルーノ伝連作中《聖ブルーノの称揚》から浮揚する聖ブルーノのイメージが借用され、メダイオンに嵌め込まれた、ヘレスのカルトウジア会の鉄柵のような興味深い作例も存在する（図12、13）<sup>46</sup>。

カルドゥーチョの聖ブルーノ伝サイクルもまた、カルトウジア会士にとって満足のいくもので

<sup>41</sup> 18世紀、ウルタード・イスキエルドがその好例で、グラナダのカルトウジア会でサグラリオの装飾を行った後、エル・パウラールのカルトウジア会でも同じようなサグラリオの装飾を手掛けた。Martín, Virginia Tovar, “Espacios de devoción en el Barroco español. Arquitecturas de finalidad «persuasiva»”, *Figuras e imágenes del Barroco*, Madrid, pp. 157-159.

<sup>42</sup> 主祭壇のためにキリストの幼児伝や聖人像などを、内陣障壁に聖母像、サグラリオ(sagrario: 至聖所)への通路の装飾としてカルトウジア会に関係する重要な聖人たちの単独立像を制作した。(Delenda, 2010, pp. 167-181.)

<sup>43</sup> ブラス・ドミンゲスは2期、ラス・クエバスのカルトウジア会の修道院長を務めており(1644-1648年、1652-1658年)、スルバランへの依頼は2期目にあたる。Cuartero y Huerta, Baltasar, *Historia de la Cartuja de Santa María de las Cuevas, de Sevilla, y de su filial de Cazalla de la Sierra*, Madrid, 1954, t. II, p. 19.

<sup>44</sup> Delenda (2010), p. 248.

<sup>45</sup> Escudero (2006), pp. 34-36.

<sup>46</sup> Campuzano (1999), p. 45.

あったようだ。完成後間もなく、一部ではあるがコピーが制作されている<sup>47</sup>。現在ではその内の13点がグラナダのカルトゥジア会、12点がカステリヨンの美術館に収められている<sup>48</sup>。残念ながらこれらがラス・クエバスのカルトゥジア会にもたらされたか否かは定かではない。しかし、カルドゥーチョに回廊装飾を依頼したフアン・デ・バエーサは、1638年から1641年までラス・クエバスのカルトゥジア会の修道院長を務め<sup>49</sup>、同地で没しており、カルドゥーチョの聖ブルーノ伝サイクルに関する情報を何らかの形でラス・クエバスのカルトゥジア会士達に伝えていた蓋然性は高い。バエーサを通して聖ブルーノ伝図像の着想がラス・クエバスのカルトゥジア会士達に共有されたのである。それでは、「禁欲」と「沈黙」の美德を示すために、27点もの作品を有するカルドゥーチョの聖ブルーノ伝サイクルからなぜ食堂の奇跡と教皇との会談の二場面を選ぶに至ったのであろうか。



(図10) 19世紀初頭の版画



(図11) アントニオ・ムニョスによる化粧タイル 20世紀 ヘレス・デ・ラ・フロンテッラのカルトゥジア会



(図12) ル・シュウール《聖ブルーノの称揚》1645-48年頃 油彩/カンヴァス 193×130cm ルーブル美術館 © Musée du Louvre/A. Dequier - M. Bard



(図13) ヘレスのカルトゥジア会の鉄柵 1665年

## 5. 「禁欲」と「沈黙」の美德を表わす《食堂の聖ウーゴ》と《聖ブルーノと教皇ウルバヌス2世》

マダリアガの食堂の奇跡の逸話を踏まえれば、「禁欲」の美德を表わすために《食堂の聖ウーゴ》の主題が選択されたことは容易に納得がいく。肉食の禁止はカルトゥジア会の禁欲的な態度を代

<sup>47</sup> Ruiz Gómez, Leticia (2013), p. 188.

<sup>48</sup> 全てが聖ブルーノ伝サイクル中の絵画というわけではなく、著名なカルトゥジア会士、殉教したカルトゥジア会士のテーマも含まれる。Varona María Cruz de Carlos, “Vicente Carducho en El Paular y la elaboración de un imaginario cartujano”, *La recuperación de El Paular*, Madrid, 2013, p. 215.

<sup>49</sup> Cuartero (1951), p. 12.

表するもので、先にも述べた通り、その厳格さは多くの称賛と、一方でいくつかの批判を招いたほどである<sup>50</sup>。マダリアガのテキストは、この修道会の禁欲的な態度を代表する修道実践の図像化のための文学的典拠を提供し、カルドゥーチョが聖ブルーノ伝サイクルにおいて初めてそれを達成した。

カルドゥーチョ作品がU字型のテーブルを用いている一方、スルバラン作品では、L字型のテーブルを用いている。作中に10人もの修道士を描いたカルドゥーチョに対し、スルバランは7人にとどめている。カルトゥージャ会の最初の集団は聖ブルーノと6人の同志たちの計7人であるから、スルバランの方が忠実にマダリアガのテキストに従っている。スルバランは聖ウーゴが食堂に着いた瞬間を描き、肉を前に座する修道士たちを目の当たりにした聖ウーゴは激昂している。彼の使用人は手のひらを主人に向け、なだめるようなポーズをとる。皿の上の肉はまだ灰に変わっていない。修道士たちも目を開いているものの、焦点は定まらず、未だ眠りから覚めていないようだ。このため、彼らは肉を前にし、永遠にその誘惑に抗い続けるのである。「禁欲」の美德を具体的な実践によって明確に示している。

一方の《聖ブルーノと教皇ウルバヌス2世》はどうであろう。一見「沈黙」の美德とは無関係であり、むしろ会談の場面であるため、矛盾した場面のように思われる。この作品に「沈黙」の美德を読み取る鍵はやはりマダリアガのテキストにある<sup>51</sup>。先の引用したマダリアガによる会談の場面の叙述は次のように続く。

ところが、聖ブルーノは孤独を深めて次第に冷淡な態度をとるようになり、そのために多くの祭事を疎んだ。日夜、彼はシャルトルズへの帰還が裁可されないことに悩まされたが、ウルバヌスは聖ブルーノの教会への貢献を考慮して、帰還には決して同意しなかった<sup>52</sup>。

聖ブルーノは、ローマで教皇の相談役という重要かつ荣誉ある立場にありながらも、荒れ野に帰ることを日々願った。こうした聖人の態度は、何よりも隠修生活が重要であることを強調している。さらに、聖ブルーノは他者との交流を「冷淡な」態度をとって忌避した。これは隠遁者の厭世的な態度であるが、こうした聖ブルーノの態度が、マダリアガの著書の第2部12章「カルトゥージャ会や観想的な生活をする他の修道会からカトリックの民衆が受ける利益」の項目で説明する観

<sup>50</sup> ビジェーガス、リパデネイラ双方のフロス・サンクトルム中でもカルトゥージャ会における代表的な修道実践として肉食の禁止が言及されている。Villegas, *op.cit.*, fol. 127v.; Ribadeneyra, *op.cit.*, p. 189.

<sup>51</sup> ラス・クエバス三部作とマダリアガのテキストの関係はバティクル、セレーラ、デレンダ、などがすでに指摘しているが、十分な検討がなされず、ほとんど引用するのみの表面的な考察にとどまっている。Baticle, *op.cit.*, p. 220.; Serrera, *op. cit.*, p. 314; Delenda (2009), p. 664.

<sup>52</sup> “Mas ya se auia buelto muy arisco san Bruno con la soledad, y por eso no gustaua mucho destas fiestas. Cada dia lo molestaua por licencia para boluerse a su Cartuxa, mas nunca vino bien enello Vrbanu, por el seruicio que de su persona recebia la Yglesia.” Madariaga, *op.cit.*, fol. 36r.

想を行う者の態度と驚くほど近似している点は看過し得ない。マダリアガによれば、

観想的な生活を行う者は神の愛ゆえに、無言、盲目、聾者と化して、よそ者だけでなく、  
両親や兄弟もまたなおさら忌み嫌う<sup>53</sup>。

スルバランによって描かれた、旧知の仲であるウルバヌスを前に押し黙り、塞ぎ込んでいる様子の聖ブルーノは、他者との交流を拒む観想生活をおくる隠者の姿であり、まさしく修道生活における観想の実践を体現している。ここで示されたのは、言葉を慎むという意味の沈黙ではなく、外界を排除し、自らの内面に専心する精神的な沈黙であると解釈されよう<sup>54</sup>。マダリアガのテキストによって、聖ブルーノの教会への貢献を示す場面は、聖人の「沈黙」の美徳を表わす新たな意味を付与された。これにより、教皇との会談の場が「沈黙」の美徳を示すために採用されたのである。

## おわりに

スルバランは《食堂の聖ウーゴ》と《聖ブルーノと教皇ウルバヌス2世》で、肉を前にしてその誘惑に抗う聖ブルーノと修道士たちと教皇庁で観想者の態度をとる聖ブルーノを描いた。マダリアガの聖ブルーノ伝の叙述とカルドゥーチョの先行作例のおかげで、カルトゥジア会の重要な美徳である「禁欲」と「沈黙」をより具体的な実践に基づいた表現で示すことが可能となったのである。こうした表現がなされたのは、ラス・クエバス三部作が修道会の美徳を称賛しつつも、その実践を日々怠らないことを観者となる修道士たちに戒めるためであろう。

とはいえ、三部作が訓戒としての機能を果たすためには、当然修道士たちの聖ブルーノ伝への深い理解が前提となる。翻せば、ラス・クエバス三部作の制作はすなわち、すでにラス・クエバスのカルトゥジア会士達が聖人伝を深く理解していたことの証左といえよう。1623年の列聖に際して高まった聖ブルーノへの敬信の中で制作された聖ブルーノ伝サイクルは、修道士や作品の移動を通して広く認知された。そして世紀後半、ラス・クエバスのカルトゥジア会において、そうした聖ブルーノ伝サイクルの中から二つの場面が切り抜かれ、聖母への信心を示す絵画を加え、修道会の美徳というテーマのもとに集約され、三部作が創出されたのである。

<sup>53</sup> “(...)los contemplatiuos que por amor del mismo Dios se hazen mudos, y ciegos, y sordos, y aborrecen no solamente a los estraños, mas aun a sus propios padres y hermanos, y así mismos.” Madariaga, *op. cit.*, fol. 178v.

<sup>54</sup> 《聖ブルーノと教皇ウルバヌス2世》とカルトゥジア会の精神的実践の関係については、拙論「スルバラン作《聖ブルーノと教皇ウルバヌス2世》研究—カルトゥジア会の霊的实践を手掛かりに—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第59号、2014年、127-142頁。

## [図版典拠]

- 図 1-3, 6 Delenda, Odile, *Catálogo razonado y crítico*, Madrid, 2009.
- 図 4 Magaña, Elena Sáinz, “La voz de las imágenes en el silencio de la cartuja. La imagen de Bruno de Colonia en el panorama de la iconografía de los santos”, *Del silencio de la Cartuja al fragor de la orden militar*, Aguilar de Campoo, 2010.
- 図 5 Domenech, Fernando Benito, *Los Ribalta y la pintura valenciana de su tiempo* (Exh. Cat.), Madrid, Museo del Prado, 1987.
- 図 7 グラナダ美術館ホームページ <http://www.juntadeandalucia.es/cultura/WEBDomus/fichaCompleta.do?ninv=CE0110&volver=busquedaSimple&k=cotan&lng=es> (2016年10月27日閲覧)
- 図 8 Volk, Mary Crawford, *Vicencio Carducho and Seventeenth Century Castillian Painting*, New York, 1977.
- 図 9 プラド美術館ホームページ <https://www.museodelprado.es/coleccion/obra-de-arte/urbano-ii-delibera-con-san-bruno/808dc4ca-8858-4a68-9207-eb7695ad7fdb?searchid=a29fc5c5-64fd-c9b0-37db-c90e9e83bb62> (2016年10月21日閲覧)
- 図 10,11 Escudero, Juan Mayo, *Iconografía de Saõ Bruno*, Analecta Cartusiana 237, Salzburg, 2006.
- 図 12 ルーヴル美術館ホームページ [http://cartelfr.louvre.fr/cartelfr/visite?srv=car\\_not\\_frame&idNotice=4697](http://cartelfr.louvre.fr/cartelfr/visite?srv=car_not_frame&idNotice=4697) (2016年10月21日閲覧)
- 図 13 Campuzano, Julia Lopéz, “La iconografía de San Bruno en las cartujas de Andalucía”, *Los cartujos en Andalucía*, Analecta Cartusiana 150, Salzburg, 1999.